

## 予測不可能な大事件から

この春、日本のみならず、世界全体が新型コロナウイルスによる大混乱を経験した。専門家は、秋冬にかけて再び第二波が来ることを予測している。社会の状況は刻一刻と変化している。昨年の今頃、オリンピックが延期になると誰が予想しただろうか。変化が激しく、先が読めず、相互に複雑に絡み合う故、物事の行く末が曖昧にしか見通せない。そういった「VUCA」(Volatility変動、Uncertainty不確実、Complexity複雑、Ambiguity曖昧)の時代が常態になってしまった。皮肉なことに、これからの社会は不安定で全く見通しが立たないという点だけは、誰の目にも明白になっている。

こうした厳しい社会状況が生じたとき、経済は一時的に縮小し、労働市場には激変が生じる。巡り巡って、人々のキャリアにも大きな影響を与える。当然ながら、生徒の進路にもキャリアにも深い傷跡を残す。

そこで、現在、キャリア教育・キャリアガイダンスを下支えするキャリア発達研究では、今回のような突発的で予測不可能な大事件は、もはや常に生じるのだということ織り込む形で、キャリア支援を考えるようになっていく。

なかでも、今回紹介する「社会正義

# 社会課題の最中で生きる 生徒たちへの 社会正義のキャリア支援

社会不安が高まるなかでのキャリア支援やキャリア教育は、何を大事にしていくべきか。

日本キャリア教育学会会長の下村英雄氏に、

これからのキャリア支援のあり方についてご寄稿いただきました。



日本キャリア教育学会  
会長  
下村 英雄

しもむら・ひでお ●労働政策研究・研修機構キャリア支援部門主任研究員、日本産業カウンセリング学会監事、筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。博士(心理学)。「キャリア教育の心理学―大人は、子どもと若者に何を伝えたいのか」(東海教育研究所)、「キャリア・コンストラクションワークブック―不確かな時代を生き抜くためのキャリア心理学」(金子書房)、「社会正義のキャリア支援―個人の支援から個を取り巻く社会に広がる支援へ」(図書文化社)など著書多数。

のキャリア支援」は、キャリア教育・キャリアガイダンスに、現代社会にあふれるさまざまな課題を解決する機能を見る。つまり、先生方が生徒に適切にキャリア教育・キャリアガイダンスを行うことで、生徒個人の進路の問題を解決するだけでなく、社会全体の各種の問

題を解決できると考える。まさしく社会課題のなかで生きていく生徒の進路やキャリアをいかに支えるかを考えるのが「社会正義のキャリア支援」である。その取り組みは、大混乱を経験した日本のこれからのこそ、有意義なものとなる可能性が高い。

## 貧困、格差：不利益を被る生徒へ

現在に至る「社会正義のキャリア支援」論の直接的な端緒は、2000年代前半、OECD、ILO、世界銀行といった国際機関が、キャリアガイダンスの機能の一つとして「社会正義」を掲げたことに求められる。

それまでキャリアガイダンスの機能は、端的に言えば、労働市場あるいは教育訓練市場のマッチングを効果的・効率的に行うことだった。つまり、生徒の特性や資質、希望や興味にあった就職をさせ、勉強したい内容を学べる学校に進学させることだった。

それに加えて、キャリアガイダンスには社会正義を実現する機能があるという議論がなされるようになった。例えば、OECDでは「キャリアガイダンスは平等という目標に貢献しうる」<sup>注1</sup>とし、世界銀行では「キャリアガイダンスは自分の人生を自分で決める権利を促進するものだから民主主義的な社会の重要な政策手段の一つである」<sup>注2</sup>と述べた。

キャリアガイダンスを適切に行えば、適切な就職や進学ができ、それなりに生計を立てられるだけの収入が得られる。そうすれば、貧困や、そこから派生する非行や犯罪を防ぐことができる。貧困層の収入を上げれば、格差を是正することもできる。結果的に、社会的

注1: Oecd (2004). Career Guidance And Public Policy: Bridging The gap

注2: World Bank (2004). Public policies for career development : Case studies and emerging issues for designing career information and guidance systems in developing and transition economies

な平等や社会的な包摂<sup>注3</sup>へとつながる。キャリアガイダンスは、社会問題全般を解決する「社会正義」の実現に役立つ営みなのだ。

こうした議論を、当時の国際機関のキャリア支援に関する報告書は次々に提起した。そして、現在もなお、世界各国のキャリア教育・キャリアガイダンスの専門家が真剣に議論している。日本でも、キャリア教育・キャリアガイダンスには、本来、これほどまでに幅広い役割があることを、多くの人に知ってもらいたいと思う。

特に、「社会正義のキャリア支援」は、新型コロナウイルスによる大混乱のなかで、生徒の進路やキャリアの問題を考へなければならぬ今のようなときにこそ意味がある。というのも、そもそもキャリアガイダンスは社会的な大混乱のなかから生まれたからである。

キャリアガイダンスは、100年以上



前、ボストンの職業相談所で始まった。仕事にあぶれた移民や貧しい地方出身の若者が大量に押し寄せるなか、そうした若者に対する就職支援を公的機関で行った。もともと社会の矛盾のなかから、社会正義の実現を目指して立ち上がったのがキャリアガイダンスである。「社会正義のキャリア支援」論とは、この原点に立ち返ろうという主張でもある。今こそこの考え方が有益だという意味は、この点にある。

貧困や格差その他の社会的な問題で進路やキャリアが阻害され、不利益を被る可能性がある（あるいは既に被っている）生徒がいるのであれば、その生徒を手厚く支援する。家が貧しくて進学の道が絶たれそうであれば、奨学金などの金銭的な支援に関する情報を提供する。機会がなくて就職を十分に考えたことがない生徒には、その機会を与える。不安なことや心配なことがあるれば相談に乗る。就職に自信がなければ、自信がもてるよう技術や知識を身に付ける方策を考える。

こうした取り組みが「社会正義のキャリア支援」ということになる。

### 社会の多様化のなかで生じる少数派

「社会正義のキャリア支援」では、ダイバーシティの問題にも着目する。格差や貧困の問題を重視し、さまざまな社

会問題全般に意識を向ける以上、人々の多様性やそこに潜む格差、格差と表裏一体の文化や環境の違いもすべて互いに密接に関連するからである。例えば、海外の研究では、これまで外国人（移民・人種含む）、性別（LGBT含む）、貧困層などの問題を検討してきた。

日本のキャリア教育・キャリアガイダンスとの関連で言えば、現在、日本社会の多様化に伴って、生徒自身およびその家庭が徐々に多様化している点が課題となる。外国籍・外国人の生徒、国籍と微妙に交錯する貧困、そこから派生する格差の問題が生じつつある。離婚率の上昇に伴い、シングルマザーなど複雑な家庭の事情をもつ生徒もいる。では、こうした生徒およびその家族の多様化は、具体的にキャリア教育・キャリアガイダンスとどのように関連するのだろうか。

日本のキャリア教育はこの20年で学校のなかに確固たる位置を占めるに至った。学習指導要領に「キャリア教育」が明記され、学校教育のなかに明確な位置付けが与えられた。当然ながら、これは良いことであり、国全体の教育

政策の一環として全国的にある程度、共通して行うべきキャリア教育が推奨されることには重要な意味がある。

問題は、そうして行われるキャリア教育は、どうしても学校のなかの多数を占めるごく一般的な「普通」の生徒を想定して計画され、実行されるということだ。日本社会の多様性が高まり、さまざまな事情をもつ生徒が現れている以上、大多数の生徒向けのキャリア教育から外れてしまう生徒が、どうしても生じてしまう。

結果的に、多数を占める一般的な生徒を対象としたキャリア教育から漏れ落ちた生徒には、一人ひとり個別に支援する必要が生じる。

実際、現在、日本では実に多様なキャリア教育が行われている。例えば、昨年の日本キャリア教育学会は長崎で開催されたが、例年にも増して、実にさまざまなキャリア教育の研究発表が行われた。目につくところを列挙しても、夜間中学、外国人、生活保護受給者、シングルマザーなど、多様な対象層のキャリア教育の実践が紹介された。こうしたさまざまな実践は、むしろ

## 「普通の大多数の生徒対象」

だけでよいのか

注3：Social inclusion. 社会的弱者を社会の一員として含め、支えあう考え方

図1 就労状況別の自己効力感・自尊感情等

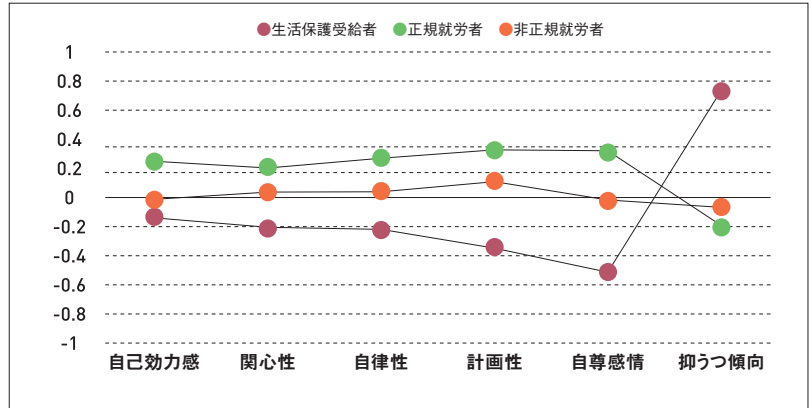
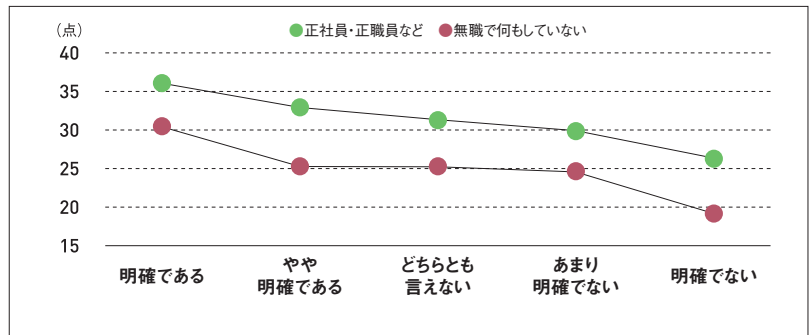


図2 就労状況別・将来の目標や自分のやりたいことの明確さ別の自尊感情得点



生活保護受給者は総じてキャリア意識(関心性、自律性、計画性)が低く、特に自尊感情が低く、抑うつ傾向が極めて高い。自尊感情の向上をキャリア支援の目標におくことが有効である可能性が高い(図表1)。将来の目標や自分のやりたいことが明確であるほど、自尊感情は高くなる。現在無職であっても将来の目標ややりたいことが明確でない正社員よりも、自尊感情は高い(図表2)。適切なキャリア支援によって、将来の目標ややりたいことを見つけることで自尊感情を高めることができることを示す。

出所: 下村英雄・坂柳恒夫・浦上昌則(2016) 生活保護受給者・雇用保険受給者の自己効力感・成人キャリア成熟度その他の意識—社会正義の視点からのアプローチ(日本キャリア教育学会第38回研究大会研究発表論文集)—

古い時代の進路指導の教科書では、明確に意識されていたことである。進路指導と進路相談を表裏一体の形で考えており、したがって、70年代から進路相談員を学校に置くことが提起されていた。現在、日本キャリア教育学会で、キャリア教育の担い手として「キャリアカウンセラー」の資格認定を行っているのは、その名残でもある。

数としてたくさんいる訳ではないことだ。それゆえ全体からみれば必ずしも大きな問題に見えない。そこがまさに問題であり、数が少なく、少数派(マイノリティ)であるために、全体のキャリア教育の問題からは見えにくいところにある。このことが、実践上、大きな問題となる。

先生方ができる3つの実践

では、社会正義の観点から、キャリア教育・キャリアガイダンスを行うにあ

たって、具体的に先生方は何をすればよいだろうか。その実践は、おおむね「カウンセリング」「エンパワメント」「アドボカシー」の3点に整理される。

まず「カウンセリング」であるが、大多数の生徒に向けたキャリア教育から外れてしまう生徒には、進路相談などの個別の対応が必要になる。

特に、社会正義のキャリア支援論では、「声」という単語がよく出てくる。これは、いわゆる「普通」のキャリア教育から外れて、容易には自分の「声」を聞き届けてもらえない生徒の存在を認めることであり、その「声」を聞くということである。これを難しい言葉で「承認的正義」と呼ぶ。オーストラリアの社会正義の教育論者であるゲイルが最も重視するのがこの正義である。

多数派のキャリア教育から外れてしまう生徒の声を聞き届け、承認することで、生徒は、ある程度まで救われる。これまで多くの研究が、少数派の生徒は、不安や自信喪失、低い自尊感情、抑うつなどの心理的な問題を抱えることを示してきた。同時に、誰かが親身になつて相談に乗ることは総じて良い影響をもたらすことも明らかにしてきた。打ちひしがれているか、そうでなければ捨て鉢になっている生徒を、再び前に向かわせるには、誰かが存在を認め、声を聞き、味方であると信じてもらう

ことが肝要となる。そのうえで、すべてを生徒個人の問題とはせず、社会の問題は社会の問題であると正しく仕分けすることで、少しでも生徒の気持ちを軽くしようとすることも重要になる。

次に「エンパワメント」は、普通の意味での進路指導・キャリア教育の取り組みと最も近い。自己理解・職業理解・マッチングというキャリアガイダンスの3原則は、社会正義論でも変わらないが、むしろ重視される。というのも、生徒の特徴や置かれた環境、抱える問題がシビアであるほど、徹底した自己理解・職業理解、両者の照合が求められるからだ。もともと、この3原則がパーソナルズによる厳しい状況にある若者の就職支援から作られたことも、改めて想起していただきたい。

仮に「社会正義のキャリア支援」に独特の視点があるとすれば、できるだけ「自己決定の手段を増やす」ということを目標にする点だ。例えば、学業成績を上げることは、それだけ進路の選択肢が多くなり、自己決定の手段を増やす。将来、就きたい職業を調べること、その職業に向けた勉強をすることも、自己決定の手段を増やす。実際に就職して、仕事をしながら経験を積むことも自己決定の手段を増やす。

世界銀行が言ったように、究極的には、キャリアガイダンスは、自分の人生

注4: フランク・パーソンズ (Parsons, F.)。マッチング理論を提唱した職業指導の創始者  
 注5: 人間らしいやりがいのある仕事。1999年ILO事務局長が掲げたスローガン

を自由に生きるために行われる。戦時中の日本の進路指導は、大正デモクラシーを背景にした自由な雰囲気から、

ほんの10年で瞬く間に一変し、国の目標が優先された。だからこそ戦後の進路指導は基本的には夢ややりたいことを強調した。自分で決めるということに対する強い憧憬は、キャリアガイダンスの根幹に組み込まれている。だから、自己効力感を高め、自ら進路やキャリアの選択に向かうという気持ちを作ることも**エンパワメント**に含まれる。文字どおり、生徒に将来を歩む力を与えることが、ここでは重視されるのである。

最後に「アドボカシー」は、本来、生徒に代わって、生徒の代弁者になって、関連諸機関に働きかけ、生徒の進路選択やキャリア発達の環境を改善するようになり組みである。

例えば、「社会正義のキャリア支援」に関する外国の専門書に、メキシコからの移民の父親が失業したため家庭が荒れてしまった生徒の事例がある。長男もぐれかかり、学業成績は下がり、昇級試験にも落第した。もともと長男は野球推薦で大学に行ける腕前で、それ

を狙っていたが、落第が原因で野球チームからも外されてしまった。

この事例で、教員はキャリアカウンセラーと協力して、試験担当の教員と交渉し、家庭の事情を勘案して再テストを受けられるようにしてもらったり、再テストの結果次第では野球チームに戻してもらえるよう交渉した。さらに、父親には英語の習得とアメリカ市民権がとれるような支援先も紹介した。

こうして生徒個人の進路の問題を解決するにあたって、方々に手を尽くして環境を整備するのが**アドボカシー**だ。私が、若い頃にいろいろ教えていただいた進路指導の先生方のなかには、何人もこういう先生が居て、各方面に話をつけては生徒の進路を具体的に実現していった。現在でもそういう先生方はいらつしやるだろうと思う。現在の学校が置かれている環境で、どの程度のこと

が可能かについては、むしろ今の現場の先生方から教えていただきたいと思う。

**社会問題を解決する主体を育てる**

環境や制度、社会に働きかける**アドボカシー**の実践から派生して、社会の

問題を解決する主体となるべく生徒にキャリア教育を行うという議論もある。

例えば、「社会正義のキャリア教育論」の第一人者であるアービングという研究者は、生徒に、自らの手で自分たちが生きる環境や社会を作り変えていく問題意識をもたせることをキャリア教育論の枠内で重視する。そのため、通常、キャリア教育で言う「自己理解」「職業理解」の他に「批判的理解」を求める。自分たちの力で、今ある社会を少しずつ良いものへと変えていくよう、生徒を導いていくことも社会正義には含まれる。

成績の良い生徒たちやそうした生徒が通う進学校では、社会正義の議論に関心が薄い場合がある。しかし、むしろそういう生徒こそ、実際に社会や世の中を変えられるような仕事に就く可能性がある。恵まれた天分や資質は少しでも社会を良くする方向へと使ってほしい。このように説くことも「社会正義のキャリア支援」の重要な取組となる。

同じような意味で、「社会正義のキャリア支援」論では、現在、ディセントワーク<sup>55</sup>やSDGs(持続可能な開発目標)のような目標とも接点を見出している。そして、キャリア教育・キャリアガイダンスを、さまざまな社会問題の解決のための方策として位置付けようとしている。

キャリア教育・キャリアガイダンスに

**「自己決定の手段を増やす」**

**「進路」を目標に**

は、さまざまなことを成し遂げるたぐさんのポテンシャルがある。

地域によっては、高校がほぼ唯一ついでいい若い力の供給源であることもある。やる気と能力のある若者が地元で有望な産業に就職すれば、そこで小さなイノベーションを起こし、地元経済全体を活性化することもできる。町で働く人も、そこで物を買ひ、サービスを受ける人も、みんなが幸せになることができる。

社会全体に影響を及ぼすことができる重要な活動として、キャリア教育・キャリアガイダンスはある。最後に、そのことを、ぜひ、先生方にはお伝えしたいと思う。

» Book introduction



『社会正義のキャリア支援』  
下村英雄著  
図書文化社

長期失業、格差、貧困、外国人、性的少数者など、社会の縁辺で苦しむ人々に向けて、今、全世界で広がっている社会正義=社会的公正を実現するキャリア支援とは。本邦初の本格的な概説書